

CIEC Newsletter

お知らせ

< 2004PC カンファレンス >

「人が生きる道具としてのコンピュータ
～ユニバーサル&ユビキタスコンピューティング
を目指して～」

開催日時 2004年8月4日(水)～6日(金)
開催場所 神戸大学 六甲台地区(〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1)

講演会

演 題 ユビキタスとエイリアネーション
講演者 辛坊 治郎 読売テレビ解説委員

参加受付は5月20日から行います。
詳細は下記をご覧ください。
URL:<http://www.ciec.or.jp/event/2004/>

< CIEC 研究会 開催案内 >

- ・ CIEC 第44回研究会開催案内 11
- ・ プレカンファレンス開催案内 12

< CIEC 会員状況 > 04年4月

・個人会員	789		
教員	575	大学職員	20
院生	44	学生	11
生協職員	86	企業	27
研究員	7	その他	19
・団体会員	96		
企業	34	生協	59
大学	1	高校	1
法人	1		

CONTENTS

< ニュース・トピックス >

- ・ CIEC 第42回研究会報告 2
- ・ CIEC 第43回研究会報告 3

< 部会活動報告 >

- ・ 学芸大附属世田谷中学校 学校訪問 6
- ・ インタラクティブ部会からのご案内 9
- ・ 小中高部会からのお知らせ 9

< CIEC 活動報告 >

- ・ 2003年度第2回 CIEC 運営委員会報告 7

< CIEC 会誌からのお知らせ >

- ・ 『コンピュータ&エデュケーション』
Vol.16 (2004年6月1日発行予定)
- ・ 『コンピュータ&エデュケーション』
Vol.17 (2004年12月1日発行予定)
- 特集原稿募集・論文募集のお知らせ 10

News&Topics

－CIEC 第 42 回研究会－

「情報教育・研究とコンピュータの関わり
における大学生協の歴史と展望」
－HELP～PCカンファレンス～CIEC－
パネルディスカッション

日時：2003年12月21日（日） 16時30分～19時

会場：幕張メッセ 国際会議場 201会議室

パネリスト：石原 裕（埼玉大学生協職員）

岡安 喜三郎（元全国大学生協連専務理事／

現日本労働者協同組合連合会副理事長）

湯浅 良雄（愛媛大学教授）

若林 靖永（京都大学教授）

司会：大久保 厚（全国大学生協連）

（敬称略）

大学生協は十数年にわたり「HELP＝高等教育の革新」というテーマを掲げ、とりわけコンピュータを中心としたよりよい勉学教育研究環境を実現するための事業に力を注いできました。さまざまな学生・院生・教職員の方々とともに、PCカンファレンスの定例開催、CIECの発足に深く関わってきたのもHELP計画の提唱を契機としたとりくみの成果です。

本研究会においては、この十数年をそれぞれの立場でHELP、PCカンファレンス、CIECに関わってこられた方々によるパネルディスカッションを中心に、今後のコンピュータを使った教育や学習のありようからCIECの今後パートナーとしての大学生協の役割まで、多岐にわたる議論がなされました。

パネリストからの報告の要旨と、会場からの発言とあわせ2時間以上に及んだディスカッションのなかで、特に大きな関心を呼んだと思われる事柄を紹介させていただきます。

パネリスト発言要旨

石原氏 現役生協職員としてのかかわりと問題提起
長らく“教材PC”を販売してきて、保有率や買い方、使い方は確実に変化している。その中で生協が役割として自覚したいと思っているのは“サポート”、特に故障なのかシステムの不具合なのか、といった将来使う人自身に役立つようなスキルの獲得に役立つようなこと。

埼玉大学で先生方と関わりを持ちながら“サポート”についてのノウハウの共有＝研究をすすめている。大学自体が大きく変化しようとしている今、CIECやPCカ

ンファレンスに積極的に関わりながら先生方とともに教育やサポートを考える必要を感じているが、実態はむしろ大学生協の関わりが薄れているように思う。なぜか？どうすればいいのか？考えるべきではないか。

岡安氏 大学生協としてのポケコン開発、NEOソフト提供、Macintosh提供からHELPの提起まで

コンピュータを、「なぜ売れるのかもわからないが売れるから売っていた」大学生協が迎えた転換点がHELP。学生が開発したソフトを持ってアメリカ市場を見に行き、逆にコンピュータが教育・研究のために当たり前に使われている様子を目の当たりにして、そこで使われているコンピュータ、教育・研究ソフトの販売をすべきだと思った。

こうしてApple Macintoshの取り扱いをはじめ、その販売経験を通じて、研究室に飛び込んで関わりをつくりながら、そのつながりからある研究室からの情報をもとに他の研究室・教官・学生にアドバイスできる、研究室どうしのつながりをコーディネートする、という事業のありかたを発見してきた。

使っている人たちから聞く、学ぶ、ともに考えるということの大切さがわかってきた。この経験を踏まえて、研究室のなかへ飛び込んでいくという仕事のスタイルを持ち、マネジメント自体も変えていくという大きな転換を「四つの戦略的事業分野」として提起したのが1990年でした。

いま大学生協で働く職員たちや学生理事はこのプロセスを知らない。こうしたビジョンをつくるというプロセスを切れ目なくつくっていくことが実は大切なのだと思っている。

湯浅先生 HELPの提起から勉学研究専門ソフトの提供PCカンファレンスづくりまで

大学生協がHELPを提唱し、「勉学研究に貢献する」と言い始めてから、真面目に大学生協に関わる気になった。EDUCOMというアメリカの学会がPCカンファレンスのモデル。当時日本では教育について考える学会という発想はなかった。日本でも教育が問われる、という問題意識からPCカンファレンスを立ち上げた。また継続性や蓄積という面で当初からCIECのような組織を志向していた。

PCカンファレンス立ち上げのときに、「大学生協が主催しても教職員は見向きもしれくれない」という岡安さんの予想を裏切ったたくさん集まった。教育についてなら誰のどんな呼びかけでも教員は目を向けるのだという確信になった。

若林先生 PCカンファレンスの年次開催実現からCIECの結成と発展

CIEC会誌「コンピュータ&エデュケーション」をずっと担当している。いま、「コンピュータやネットワークと私たちとの距離感」について考える必要があると思っている。

HELPを提唱した頃は、コンピュータと出会って「何かが変わるのではないか」というドキドキワクワクした感覚を持ってやってきた。今ではドキドキ感は無くなってしまったように思うが、自分はまだ第二劇があると思っている。これまで以上に、これからコンピュータを使って何をやるのか、次のステップについて語り合う時。大学生協にとってもコンテンツビジネスというテーマは重要。

CIEC自体は、普通の学会に比べてのびのびとやれる、また奇抜な人たちの集団で非常に居心地のいい場になっている。大学のなかでコンピュータのことで困っている教職員もまだまだたくさんいるし、PCカンファレンスやCIECを大学生協と教職員のリレーションを変えていく力を持った場だと自覚をして使っていけばいい。

関心と呼んだ事柄

「教育」を変革するということ、そのことを通じて社会を変革したいというCIECがもともと持っていたミッションがある。そしてこれから第二幕について語りあいたい。

「学び」自体や「わかるということ」、学生自身の「ヒトとして生きるチカラ」をテーマとしてとりあげるべきだし、そうやってきた。そのためのツールや環境としてのコンピュータを考えるとという捉え方になってきている。

大学生協は、「学びのコミュニティ」でどう役割を發揮するか、という発想で事業をリデザインすべき。

大学が大きく変化し、大学自体が稼がなくてはならなくなってきたいま、生協は見向きもされないしむしろオミットされる。これはこれまで私学が経験してきたことを国公立でも否応なく経験せざるを得ないということでもある。

なぜ大学生協は教職員とのリレーションを重視するのか、何をミッションとしているのかをきちんと説明できなければ支持されないし大学のなかで役割を發揮できるはずもない。

学生に対しても、学習者への理解と学習共同体へコミットできるミッションを構築すべき。デジタルデバイス問題などは事業として当たり前のことに、そして過去のものにしないでほしい。

「4つの戦略的事業分野」そのものが、ようやく理解され

ようとしているという到達ではないか。10年ほど前に大きな転換点があったのだという理解そのものが必要である。

-CIEC 第43回研究会-

共同利用を前提とした英語 e-Learning ビデオ教材の制作

日時：2004年3月20日（土） 13時30分～17時

会場：大学生協会館 2階会議室

「実験用サーバの運用とコンテンツ作成環境について」

上村 隆一（北九州市立大学）

「VOA素材を利用したオンライン・パーソナルディク
ション教材の開発」

吉田 晴世（大阪教育大学）

「VOA配信素材 Snapshot を利用した教材開発(1)」

松田 憲（立命館大学）

「VOA配信素材 Snapshot を利用した教材開発(2)」

野澤 和典（立命館大学）

実験用サーバの運用とコンテンツ制作環境について

上村隆一（北九州市立大学）

外国語教育研究部会として「VOAプロジェクト」という英語教材開発プロジェクトを立ち上げることになった経緯と、研究計画の概要が紹介された。

昨年夏、CIECとVOA(Voice Of America)放送の提供元である米政府系機関IBB(International Broadcasting Bureau)との間で放送内容を教育目的に二次利用するための団体契約が締結された。このことによって、CIECの会員であれば、衛星放送で提供されるテレビ番組を録画・加工し、所属校の授業等で活用することが可能になった。番組で取り上げられるテーマ、分野は政治・経済・歴史・文化から芸術・科学技術まで多岐にわたっており、さまざまな授業科目で利用することが期待できる。さらに、インターネット環境でのビデオコンテンツ供給とオンライン教材作成の体制が整備されることにより、将来CIECwareとして商品化する可能性もあることが示唆された。

次に、現時点までの研究経過報告に移り、具体的な実証実験の内容が説明された。第一に、鹿児島大学のプロジェクトメンバーに現在VOA衛星放送で放映中の番組からいくつか試験的にDVD録画してもらい、ビデオ

データをパソコンに取り込みながら複数の異なるコーデック(Real, WindowsMedia, QuickTime)でエンコードした。第二に、本実験用に VOD ストリーミングサーバを立ち上げ、上記ビデオクリップを登録、多様なインターネット接続環境を想定した配信実験を実施した。第三に、部会世話人の作業分担を決め、配信実験に用いた一部のテレビ番組(Snapshots)について、英語音声書き起こし依頼(英語母語話者)と語彙、聞き取り、内容理解等の設問試作を行った。

その結果、今後検討すべき課題として、次のような項目が挙げられた。

- ・本部会の世話人が直接利用できる VOA 放送受信設備の必要性
- ・ウェブ教材のサーバ管理(認証、履歴など)一元化への対応
- ・ストリーミングサーバのファイル管理(バックアップ)とリスク分散の問題
- ・教材コンテンツの制作に関わるツール(HotPotatoes など)仕様の不備と商用版開発へ向けての著作権調整問題



VOA 素材を利用したオンライン・パーシャルディクテーション教材の開発

吉田晴世(大阪教育大学)

第1報告者の上村氏の共同利用システム開発の経緯、作成方法などの解説を受けて、具体的な実践例を中心に報告を行った。1)大阪教育大学におけるweb利用英語学習システム、2)オンライン・パーシャルディクテーションにおけるリスニング能力の育成、3)共同利用を前提とした英語e-Learningビデオ教材の制作、の3点を中心にデモを加えながらの解説という形式で進められた。

大学内研究用サーバを利用して英語学習用Webページの活用し、オンライン教材を提供・実践してきており、その一環としてこれまでに、VOA(Voice of America)を学習教材として用い、オンライン・パーシャルディクテーションにおけるリスニング能力の育成を実践してきている。CGI機能を利用し、トランスクリプトに空所を設けたクローズテストをコンピュータ画面に表示させ、自己ペースで音声ファイルを再生しながら空所補充し、音声も繰り返し再生させていくというものである。

システム使用の意義としては、1)学習者が即時フィードバックによる解答結果を受け取り、得点や誤答の箇所を迅速に知ることができる、2)学習記録がデータとして残されるので、誤答の分析およびその類型化を迅速かつ容易に行える、3)インターネットができる環境にあれば、時間と場所を限定せずに学習できる、そして、4)英文を読みながら、音声を何度も聞き取りすることで、「繰り返し学習：リハーサル」の効果を得ることができ、ひいては「長期記憶に結びつく」ものであると予測される。

CIEC共同利用英語e-Learningビデオ教材においては、上記の文字音声情報に加えて映像の効果を得ることが期待できる。文字・画像・音声情報を統合的に扱えるシステムは、英語表現が使われる画面を見ながら音声を聞いて、視覚と聴覚に訴えながら学習することが可能である。このことにより、想起の手がかりが単一の形態で表彰される情報より多くなるため、記憶再生が向上される。英語字幕の効果としては、英語音声を英語字幕にして視聴すると、聞く内容を文字でも確認できリスニングとリーディングを連結した学習が可能となる。

本システムの学習効果については、4月より授業シラバスに導入し中長期的な継続訓練を行うことにより、形成的評価を中心として検証していく予定である。

VOA 配信素材 Snapshot を利用した教材開発(1)

松田 憲(立命館大学)

第三報告の教材は、California州のMendocinoという地域を紹介した番組(Windows Media Video形式でエンコード)を素材にしている。この素材を教材化する際に、まず(1)リスニングにおけるトップダウン処理を採用するとともに、クラスでのディスカッションやグループ学習への発展がはかれるような設問・タスクを配置する、(2)設問部分のプログラムコードは、free software

として流通している HotPotatoes Version 6 (Javascript のプログラムを自動作成する) を使って作成する , (3) ビデオ動画と音声の反復的視聴と設問の段階的な配置により , リスニング能力の向上をはかる , という点を重視して , 以下のような各ユニットのタスクが配置された。

UNIT 1 番組を視聴する前に , 紹介される地域についての予備情報を入手させることと , 重要語句についても予備的にチェックをさせる。

UNIT 2 最初のビデオ番組視聴のあと , 全体のトピックのポイントを把握することを目標として , Open Questions を配置する。

UNIT 3 字幕を表示可能なビデオ画面を出して , 視聴後に多肢選択式の理解度チェック問題に移る。解答にはタイマーで指定した時間内で答えるように設定している。

UNIT 4 第3回のビデオ番組視聴。やや詳しく聞き取れることを目指して , 重要語句の理解度チェック設問と組み合わせて , UNIT1 での学習の復習にも役立てる。

UNIT 5 このユニットでは音声を聴きながら答える dictation と組み合わせた Cloze テストを配置して , センテンス・レベルでの理解をめざす。

UNIT 6 このユニットは , これまで学習した内容をベースに自己表現活動に発展させることを目指して , 発展的設問を配置している。各自の意見発表は授業用の掲示板にポストして全員で共有可能にする。

UNIT 7 これまでの学習の仕上げとして , 個人あるいはグループで行う番組関連の調べ学習の成果発表となっている。

上記のような内容の教材作成例を提示した上で , 問題点としては , (1) VOA 番組のうち , 教材として適切なものを選択することの難しさ (2) 番組のスク립トがないので , これを書き起こすための労力の問題 , (3) プログラム作成のプラットフォームの選定 (HotPotatoes の長所と欠点) の問題 , (4) 共同の学びの仕組みに統合するための仕掛けの工夫のありかた , などが指摘され , 今後解決にむけて , さらに研究を進めていくことになった。

VOA 配信素材 Snapshot を利用した教材開発(2)

野澤和典 (立命館大学)

第4報告の教材は , Hawaii 州の Molokai Island と Maui island を紹介した番組を素材にしている。これらの素材を教材化する際に , 第三報告者と同様に , 素材の中のキーワードの学習やリスニングを中心とした学習が図れ

るような設問・タスクを配置した。

英語母語話者によって音声素材からスクリプト化がな



された後 , 設問部分の作成には , 全 6 種類の異なる JAVA Script exercises の作成が可能で , 教育関係者なら正式登録後は無料でフルに利用できる Hot Potatoes for Windows98/ME/NT4/2000/XP (Version 6.0.3) を活用し , 3 種類 (JQuiz、JMatch、JClose) を使って作成した。その結果 , Hawaii Part 1 Molokai と Hawaii Part 2 Maui について , それぞれ次のような構成となった。

Vocabulary Exercises Ordinary Style
Vocabulary Exercises Drag-and-Draw Style
Listening Comprehension Questions
Listening for Details Fill-in-the-Blank Exercises
Selected Hawaii Resources (For further readings)

上記のような内容の教材作成例を提示した上で , これまでに集約される問題点としては , (1)VOA 番組素材 (米国の都市を中心とした紹介番組) の妥当性 , (2)番組のスク립トが用意されていないので , 英語母語話者の協力を得て作成したのであるが , これを書き起こすための労力と正確さの問題 , (3)教材作成のプラットフォームの選定 (Hot Potatoes 利用における利点と欠点) の問題 , (4) 不足している Reading Exercises や異文化理解問題の作成の是非 , (5)共通のインターフェイス作成と具体的利用における教材サーバの分散化の問題 , などが指摘された。

今後のさらなる関連研究、新たな素材の加工、そしてそれらの実験的利用のプロセスを踏まえ、改善・解決にむけて、さらにプロジェクトを進め、事業化を含め、公開の妥当な手段を検討していくことになった。

学芸大附属世田谷中学校 - 学校訪問 -



昨年末の12月10日、東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校を訪問した。事前に学校長への申し入れを行い、当方からは小中高部会4名、事務局からは野口さんが参加した。古くからの住宅街である世田谷はみちが狭く、自由が丘駅から東急コーチという小さなバスで10分、途中どこでもブザーを押せばおりられる区間あって、都会の中の田舎を感じさせる環境がまだ残っていた。

犀川政稔校長、担当の矢嶋昭雄先生、情報担当の鍋島尚子さんと校長室で挨拶し、そこで概論を矢嶋先生から、そして、教室をまわって鍋島さんから説明をうけた。

当日は、特別時間割になっていて午後は放課後で、行き交う生徒達は訪問者になれていた。各教室では数人ずつが談笑し、理科室では科学部がカルメ焼きをつくっていた。図書室は満室のようににぎわっていて、まるでサロンのようであった。今回は、中学の情報教育の実情を知ること、また、大学の附属校として小中高一貫教育の中でどのように工夫されているかの一端を知ingことを目的とした。(一貫教育カリキュラムについての資料を一部もらい受けたがこの点は今回触れない)

学校の規模は、学年1クラス40人で4クラス、男女比は1:1、全校で約500人である。小学校からは5/6の100名が進学して、60名を新たに募集する。附属高校へはその3/8がすすみ、教員の異動はあまりなく、長い勤務者が多いようだ。

カリキュラムに関しては、今年(2003年)から3年間「英語教育の充実・改善」文部科学省の研究開発学校の指定を受け、カリキュラムは学習指導要領の基準をはずして大幅にかえられた。英語の授業時間は1年、2年、

3年をそれぞれ6単位、3単位、3単位ですすめている。

また、一般の教科指導では、1学年4クラスに対し、ひとつの教科をひとりの教師が1限から4限まで、同じ日にやり終えるため、行事や祝日によるクラスごとの進度の片寄りがないようである。

情報教育に関しては、昨年まで「総合的な学習の時間」にコンピュタリテラシーが含まれていて、1年で70時間、2年で35時間が配置されていた。今年は2,3年の週2時間「表現」の時間に含まれ、教科の中に下位目標(「基礎的・基本的な学力」、「コミュニケーション能力」、「情報活用(収集、整理、発信)の力」、「問題を発見し、解決する力」、「個性、創造力を発揮する力」として英語教育といっしょに位置付けられているようだ。そして、もはや「リテラシー教育」はない。60名の新たな募集生のうち、コンピュタを触ったことのない子は1,2名であるし、小学校ではマック、中学ではウインドウズ、高校ではまたマックが登場するということが、子供達ははじめにちょっと戸惑うだけで、難無くこなしていくからだという。



設備条件については、総合学習室に42台のNECメイトがあり、OSはウインドウズ2000で、かつてのノートパソコン用機をつかって、近年入れ替えた。ネットワークは学内のみ繋がっており、先生の画面はプロジェクターで見る。カバンは持ち込まないことにしている。

この他に各教室に1台、図書室に2台、多目的室に東芝ダイナブックノートパソコンが42台。導入しているソフトはパワーポイントとオフィス、ホームページビルダー。ファイルの保存方法は生徒用サーバーを用い、個人はCD-Rとフロッピーを利用するようだ。

授業に関しては、情報助手と教科教員とで行う。活用

状況については、テーマ学習の中で、ポスターをつくり、林間学校の調べ学習、教科では国語がよく使ったとのこと。Tシャツづくりを3年生で実施している。

この他、英語の自習用ソフトCASECが活用され、英語のレベルアップに使われている。数学ではほとんど使わず、「できるのだけど、使わない」教育をしている。大学とは教室を繋いで、教育実習の中で大学にいる先生と交信することもある。メンテナンスは業者。放課後の学習は火、水、木と月、金で担当と時間が違う。外のインターネットとの関係ではブラックリスト方式でコンテンツフィルタリングがかけられ、教員用のサーバーは別のネットワークになっている。

各教室用の1台をみてまわる。コンピュータが黒板に並んでおいてあり、白墨の粉がとんでいたのだろうが、ちょっとほこりをかぶっている。その場にいた生徒達に聞いたところ、あまり使っていないし、使っているところでも休憩時間などにゲームをやっている程度だという。



図書館にいったら。あまり広くない部屋は子供達で一杯だった。たまり場のようにおしゃべりをし、黙って本を読み（といってもマンガが多かった）、図書委員が本の整理をして、貸し出しの作業をコンピュータで処理していた。司書の村上恭子先生にうかがった。2万冊のうち、1万冊が貸し出し対象になっていて、92年からコンピュータ管理にかえた。

本の購入は保護者会のお金が主力なので、比較的不自由なく更新できている。処分する本や雑誌は古本市をして、ユニセフ募金等にしている。動くものからラベル化したので、番号の無い本がある。子供達にとっては情報館という感じになっている。

大学の附属中学という条件はあるが、ここではもはや

「リテラシー教育」はない。放課後も、家でも自然に触っていて、教科でも自然に使われている。しかし、片寄りはあるようで、調べ学習とポスターづくり、自習用などのみ。使えて使わない授業をしているのか、使えないから使わないのかは定かでない。もう一つ、公立学校の実態はどうなのか。一昨年の2月に訪問した杉並の区立中学ではまだ、放課後、コンピュータ室はかぎがかかっていたし、授業での活用は限られていた。文部科学省のミレニアムプロジェクトの具体化の実態をもう少し見る必要がある。

（文責 仲田 秀）

CIEC2003年度第2回運営委員会報告

日時：2004年3月21日（日）14：00～17：00

場所：大学生協会館2階201会議室

出席：佐伯、松田、矢部、赤間、綾、一色、小野、立田、筒井、野澤、原田、若林、板倉

今國（監事）

オブザーバー：橘

事務局：野口、羽田

欠席：湯浅、小林、武沢、大野

議題および討議内容報告：

0．審議に先立ち、会長承認のもとに橘会員のオブザーバー参加を確認した。

1．各専門委員会・各研究部会からの事業報告と次年度計画概要報告の件

各専門委員会、研究部会から報告がされ、引き続き、大学生協との共同で進められている電子教材委員会の報告がされた。

次年度計画については5月末運営委員会までにさらに論議を重ね、理事会からの定例総会提案のたたき台としていくこととする。

2．2003年度事業報告および2004年度事業計画策定の件
矢部副委員長から提案され、おおむね提案どおり確認されたが、字句の修正も含めて、さらに次回運営委員会までに具体化に向けた論議を深めていくこととした。

3．2003年度決算方針検討の件

(1) 決算見込みと決算報告（第一次）確認の件

事務局から提案を行い、第一次案として確認した。最終決算が確定するのは4月中旬以降であることから、予算作成上必要なポイントとして確認を行った。なお、最終決算結果を改めて理事会に提案することとする。

(2) 当期収支差額処分計画検討の件

次年度繰越額については、事務局提案どおり確認した。TV会議システムの今年度経費での購入については保留とし、十分に実行効果を確認したうえでの購入とするため、購入金額の留保も含めて別途検討することとした。

(3) 監査実施の件(4月6日 内部監査 / 5月13日 日本監査)

標記のとおり確認した。

4. 2004年度予算計画検討の件

2004年度予算として、一部修正して、理事会に提案していくことを確認した。なお、3項目について意見が出され、調整していくこととした。

(1) 部会交付金については、部会規約の検討が終わっていないため、昨年同様の部会援助金として措置することとした。

(2) 前回の運営委員会で英文誌の発行のための費用50万円を予算化することを確認した。2004年予算(案)ではその後の検討が進んでいないため明確な予算化を行ってこなかったが、暫定的に理事会費用に計上しておくこととした。

(3) CIECwareの収入が安定的に増加している。また、プロジェクト事業のCIECware化が期待できるものも増えてきている。一方では、出版事業での著作権料の取り扱いなどが規定されていないなどの現状がある。今後の発展を考慮した場合、製作者のインセンティブをどのように取り扱い、規定していくのかを検討していく必要がある。今年度予算上では検討しないが、規定作り等の作業を進めていく。(なお、検討資料としてタイピングクラブの収入実績について、決算書に添付することを確認した。)

5. 2004年度プロジェクト事業審査結果報告と提案事項確認の件

インテル協賛プロジェクト採択理由も含めた審査委員会の報告および提案について確認した。なお、次年度の取り組みについては、予算論議にもあるCIECwareの課題や企業協賛の進め方、審査の進め方など今後さらに検討していくこととした。

6. 部会の組織および運営に関する規則制定の件

原案に対して、以下の意見が出され、次回運営委員会までの検討となった。理事会への提案は見送ることとする。

(1) 部会の構成員をCIEC会員のみとして、オブザーバーの参加を認める形とする。ML規定との不整合が出るため調整を行う。

(2) 部会の報告義務や事業計画承認等について、規定内

容をさらに検討していく。

(3) 部会交付金の申請について、次回運営委員会までにさらに検討をする。

7. 2004年度学会表彰実施に関する件

定例総会で規定後初めての実施に当たるため、「該当者なし」にならないように、運営委員会、理事会で推薦者を検討していくことを心がける。締め切りは4月末日。なお、会誌での対象となる論文は、表彰規定により10号~15号までとすることを確認した。

また、候補者記入欄が1名分しかないが、複数のグループの候補者とする場合はダウンロードしたファイル文書の「行」を加えて記入することを確認した。

8. 大学生協連「学会システムの構築と新規事業化」の協力支援に関する件

事務局からの提案を受け、協力支援していくことを確認した。また、製作に関わるネットワーク委員会WGの方の謝金等についても十分に考慮していくようにとの意見が出され、確認した。

9. PCカンファレンス開催に関する件

下記報告および提案を確認した。

(1) 2004PCCの進捗報告

(2) 2005PCC開催校決定と実行委員会組織化に関する件

10. 2004-2005年度役員改選に関する件

下記3件について、理事会に提案し進めていくことを確認した。

(1) 事務局長ポスト設置の件

(2) 次期役員候補検討の件

(3) 役員改選スケジュールの確認

11. 理事会 ML 提案事項確認の件

「部会の組織および運営に関する規則制定の件」を除き、一部修正をして、理事会に提案していくことを確認した。

なお、決算、終始差額処分案および予算案については、3月末実績の確定時期(4月中旬)に、改めて確定数値を確認することとした。

12. その他連絡調整事項

報告どおり確認した。

(1) 総会までのスケジュールの確定

(2) 次回2003年度第3回運営委員会

2004年5月30日(日)10時~13時 総会議案他

(3) (株)インテルからのアメリカ視察要請について
大学生協経由で要請が来ていることから、大学生協連団体理事の板倉委員および矢部副会長に人選について一任することを確認した。

インタラクティブ研究部会からのご案内

【ご案内・呼びかけ】

1. 建設的会話支援システム

(Constructive Conversation Support System)

を使った授業を小中高で是非、実践してみませんか

システムに関する説明・ダウンロードは、下記からできます。

<http://studio1.idd.tamabi.ac.jp/CCSS>

2. CCSSを使った実践事例や失敗談を交流する研究会を秋ごろに開催しませんか

3. CCSSを使った感想や質問などは下記MLへ投稿してください。

iej@ciec.or.jp インタラクティブ教育研究部会メーリングリスト

メーリングリストへの参加登録は、下記からできます。

<http://www.ciec.or.jp/ja/aboutUS/maillinglist.html>

(注) CCSSに関する技術的な問題や使い方などの論議ではなく、CCSSの意図する狙いについての事例交流を中心に議論しましょう。

【CCSSの概要】

インターネット通信を利用した、サーバ/クライアント形式のマルチクライアントチャットシステムです。

視覚的に発言の関係を認識可能にすることにより、建設的会話および議論を支援するものです。

サーバには複数の発言グループ「部屋」を設定することができ、ユーザはクライアントを通じて、それぞれ任意の部屋に所属し、同じ部屋に所属する他のユーザとクライアント画面上に表示されるツリー構造の表示により発言の関係を認識しながら会話することができます。

教室内での一般的な討論支援のほか、ディベート授業での討論支援も行える。

【佐伯先生の紹介文】

CCSSというのは、どちらかというと「崩壊寸前の学級」向けのシステムです。

つまり、通常の授業には参加しにくく、他人とまともに議論もできず、教師が用意した授業の展開にはほとんどついてこれないというような生徒たちがいるクラスでも、クラスの議論にみんなが「建設的に」参加できるように会話を支援するものです。もちろん、まじめな生徒さんたちのクラスでも十分有効ですが。

ともかく、気楽に使ってください。クラスでお互いが「あいつ、案外いいこと言うじゃん」という相互の発見のもとに、議論が楽しくなるシステムです。

青山学院大学 佐伯 胖

< CIEC 小中高部会からのお知らせ >

新著

「コンピュータなんてへっちゃら～授業で使えるポイントとトラブル対応～」完成



佐伯 胖・監修

CIEC・編著

(コンピュータ利用教育協議会)

発行：日本文教出版

定価：2,100円

平成17年度には各学校の普通教室に2台のコンピュータと1台のプロジェクタが設置される「ミレニアムプロジェクト教育版」が実施されます。この中で授業におけるコンピュータの幅広い利活用が求められています。しかし、現在の初等学校教育現場では、情報検索の手段でのコンピュータ利用や上級者による授業実践からなかなか広がっていないのが現状です。

この現状を好転させるべく、教員をどう支援するか小

中高部会では、「情報環境支援プロジェクト」として、研究を重ねてきました。

このプロジェクトの中で、コンピュータ活用の初級者である多くの教員に、授業で使えるポイントとトラブル対応をどのように伝えていくべきかを焦点化させ、以下の段階を経て、この本にまとめていきました。

現場のコンピュータ利用の実態についての話し合い（現状分析）

執筆者による授業実践（「教科」や「総合的な学習の時間」の内容）

授業実践の内容検討（誰でもできる実践ポイントの明確化）

執筆者以外の先生による再実践 or 執筆内容のモニタリング

編集作業・出版へ

この過程の中で、授業での使用場面や使用方法をポイント化していきました。合わせて、よく起きるコンピュータトラブルを集約し、初級者が対応できる範囲を明らかにしていきました。

ぜひ、多くの学校現場の先生方や教員をめざす学生にもご紹介頂き、コンピュータ利用教育の裾野を広げていただけるようお願いします。



『コンピュータ & エデュケーション』 特集原稿募集のお知らせ

会誌『コンピュータ & エデュケーション』Vol.17(2004年12月1日発行予定)では、「情報教育とコンピュータ教育のあいだ」(仮称)と題した特集を組む予定です。特集に際して、会員の皆さまからの投稿を受けつけます。詳細は下記の「特集の目的と募集テーマ」をご覧ください。皆さまのご投稿をお待ちしております。

(CIEC 編集委員 籠谷和弘)

[特集の目的と募集テーマ]

特集「情報教育とコンピュータ教育のあいだ」(仮称)

・目的

本特集の目的は、学校教育における「情報教育(情報活用能力を育成する教育)」と「コンピュータ教育」との関係性を再考することにあります。

「情報活用能力」とは、文部科学省が情報教育で獲得すべきものとして提唱しているものです。

授業によって身につく知識も情報ですから、実は「情報活用能力」という視座は、本来学校教育での全教科・科目で自覚されるべきものと思われま。中学校技術・家庭科における「情報とコンピュータ」および高校における教科「情報」の新設は、情報活用能力の獲得にあたり必要な措置でしょう。しかし一方で、他教科において情報活用能力への注目を薄れさせる可能性もあります。学校教育の中で「情報活用能力」という目標をどのように位置づけるか、というのは情報教育において重要な問題であると思われま。

そういった問題とともに、「情報とコンピュータ」や教科「情報」自体の問題点も指摘されています。たとえばその内容について。「情報活用能力」はコンピュータが扱う情報に限定されない、個人とあらゆる情報との関係づけをめざすものであるはず。しかしこれらのプログラムでは、その内容はコンピュータの利用に偏っています。あるいは受験との関係。「情報」が入試科目とならないことにより、高校教育の中で「情報」がいわば持てあまされた状態にあることも指摘されています。

本特集は「情報活用能力」をキーワードとして、学校教育における情報教育の位置づけ、そして新設された教育プログラムがこのコンセプトをどこまで実現できるかを評価することをめざすものです。

・投稿を募集するテーマ

「目的」を踏まえ、本特集では以下のテーマに関する投

稿を募集いたします。会員の皆さまからの積極的な参加をお願い申し上げます。

(1) 「情報活用能力」と現在おこなわれている情報教育との関係「情報活用能力」概念と、その具体化である学校教育での情報教育プログラムとのあいだに存在する(可能性がある)ギャップについての議論

(2) 学校教育における情報教育の位置づけにかんする問題
学校教育の中で「情報活用能力」の育成をどのように位置づけ、実践していくかにかんする事例紹介と考察。具体的には、総合的学習や科目間連携などの教育プログラムについて。

(3) 「情報」科目の現状

教科「情報」の現状について、定量的なデータの紹介と考察

[応募要領]

投稿を予定される方は、まず応募のお申し込みをお願いいたします。投稿予定の原稿についてCIEC事務局まで、

- ・ 題名(仮題可)
- ・ 概要
- ・ お名前
- ・ ご所属
- ・ 連絡先(メールアドレス)

をお寄せください。

応募申し込み締め切りは2004年5月31日(月)です。

特集の趣旨と異なる内容と判断できる場合、特集論文としての掲載をお断りすることもございますのであらかじめご了承ください。

原稿の投稿締め切りは、一般投稿と同じ2004年8月20日(金)です。原稿は「投稿規定」「執筆要綱」にしたがった様式での執筆をお願いいたします。投稿される内容は、「論文」だけでなく「活用事例」でも結構です。いただいた原稿は一般投稿と同様、審査員による査読をおこないます。

* 一般投稿も随時受け付けます。

詳しくは6月1日発行『コンピュータ&エデュケーション』Vol.16をご参照下さい。

問い合わせ先
CIEC 会誌編集委員会事務局
email:edit@ciec.or.jp.

< CIEC 第44回研究会開催案内 >

テーマ 「インテルの最新CPUによるワイヤレスコンピューティングとアップルの最新テクノロジーによる教育活用」

日時 2004年5月29日(土)

13:30~17:00

会場 大学生協杉並会館 2階会議室

(東京都杉並区和田 3-30-22)

開催趣旨

世界最大の半導体メーカーであるインテル社は、ワイヤレスコンピューティングをベースにしたモバイルコンピューティング分野にも重点を置き、新たなコラボレーションツールの提案を行っています。

また、教育とテクノロジーの融合を目的として教育支援活動を行い、科学、数学、エンジニアリング、テクノロジーなどに関する教育の向上を通して、学生と地域社会に貢献する教育支援プログラムを展開しています。

アップルコンピュータ株式会社は、世界中の学生、教育者、プロのクリエイターそしてコンシューマに、革新的なハードウェア、ソフトウェア、およびインターネット関連の製品・テクノロジーを通じて最高のパーソナルコンピューティング環境を提供しています。

東京大学では、この4月より、UNIX 端末として iMac 1149 台の NetBoot 環境が稼働しはじめておりますし、このほかにも、さまざまなプラットフォームのコンピュータが混在するネットワーク環境を、最新テクノロジーで効率的に管理・運用を行っている教育システムが、増えています。

この研究会では、インテル社とアップルコンピュータをお招きし、事例報告を交ながら、ワイヤレスコンピューティングの急速な変化とこれからの方向性や、ストリーミングなどのマルチメディア関連に強い Unix ベースの Mac OS X についての最新の話題をわかりやすくお話いただく予定です。そして、少しでも、これからの教育や研究現場で活用する上でのヒントになれば幸いです。

＜プレカンファレンス開催案内＞

開催概要

テーマ 「勉強と学び」
日時 2004年6月13日(日)
13:30～17:00
会場 神戸大学 神大会館
(<http://www.kobe-u.ac.jp/access/index-j.html>)

プログラム (敬称略)

13:30-15:00 講演:「勉強と学び」
佐伯 胖 (CIEC 会長, 青山学院大学教授)

15:10-15:55 実践事例
下山裕子 (小野市立大部小学校教諭)
橋場弘和 (神戸大学発達科学部附属明石中学校
教諭)
吉田 賢史 (甲南高等学校・中学校教諭)

講演要旨

佐伯 胖 (青山学院大学)
「勉強」ということばは、習得すべき知識や技能があらかじめどこか(学習者自身とは別のところ)で決まっ
ていて、学習者は、それを一定の定められた時間内で習得し
なければならないという義務感、あるいは外部(教師、親
など)からの圧力(プレッシャー)のもとに行われるこ
とである。それに対し、なんらかの「のぞましいこと」(い
わゆる「善い」こと)が、「わかるようになる」こと、あ
るいは「できるようになること」が、外部から与えられた
基準(達成度や習得時間について「・・・ねばならない」
とされること)とは無関係に、学習者自身の自己決定(コ
ミットメント)にもとづくなんらかの実践活動を通して
、結果的に「わかるようになる」、あるいは「できるよう
になる」という事態に至ることを、「学び」と名付けてみ
よう。もちろん、人は「学び」だけで生きていくわけに
はいかず、たまには「勉強」も必要だ。だが、「勉強」だ
けでも生きていけないことも確かだ。したがって、私たち
の課題はこの両者の違いを認めつつ、両者をどのように関
係づけて、あたらしい「教育」を切り開くかが大きな課題
となる。

研究会・プレカンファレンスの参加申し込みについて

参加費

- ・第44回 CIEC 研究会
CIEC 会員は無料, その他の方は 500 円となってい
ます (どなたでもご参加いただけます)。
- ・プレカンファレンス

参加費無料

お申込み

CIEC 事務局 e-mail : sanka@ciec.or.jp
TEL/FAX 03-5307-1195 / 03-5307-1196

研究会への参加について

参加を希望する研究会の名称と 1. 氏名 (ふりがな), 2. 所
属, 3. 担当教科 / 業務, 4. 住所, 5. TEL, 6. FAX, 7. e-mail, 8.
情報教育との関係, 9. 情報教育について関心のあること
悩んでいること, 10. 今回のテーマに関する意見や質問
事項をご記入のうえ sanka@ciec.or.jp までお願いいたし
ます。

